

医史雑話
八

の藥州を觀ふ復甚し此時に於て常は有処
の草は一種の賤くべきに却有復たを知らざると云是
其園の園丁我友人を道尋きて其貴重なる
苑圃を能悉觀せしめざるに依て我友飯を
臨し是を謝するに貨を以てせしむ彼園丁又一
箇の秘寶藥を不用して能食を進むるの法を傳
へざる是とい之と故に此時に我友人數日已前より
飲食のらく不進の症を得て悩むるに此復たを
此園丁に請ひしに園丁即茵陳草を五手に
捧ぎ來りて曰此藥を莫大小の中及履の裡
足の蹠の下に入ル置て毎朝其新收ふ葉を入
へて初ハの葉を除べ然るに則能食する復たを得
しと友人是に從ひて右の如くせしむるに果
して平愈せり人下略 西洋雜記

霍亂識を予癘症を復ふ人下初發より半月
許前文の如く致せしむるに更に効あり予に批
手故に四人を試し一人に効あり

小琉球の島の辺に婦人産を以て皆其産家の辺を
一七日の間晝夜火を焚き置也家が多き者は何百束
燒多しと云新を多焚きを手柄と云ふ負敷と云ふ

皆夫くま焼也。夜と白昼の如く。夫故其屋六格
別暖うを汗と出ふ程あり返して養生よみと云
へ。昔々々の習をくハ不思議の者也。逸國ハ
腹帯と云夏絶く服し椅子の中をまはりし
横寐せ流と云夏も無夏也。産後ハ決り横り
卧して血気を納む夏也。貧者ハ医者も産婆
と服られ共皆安産し難産ハ甚稀形ハ又薩州
のころの風儀と云小兒疱瘡を多し時ハ初
終まじ白粥をやさく煮て夥る食せしむ。昼夜
是を進めて其粥の汁許りまじと飲り。其底の
堅きしまじハ家内の人喰ふまじ。飯と服し
貯ふ其乾飯顆を出来て壹人の疱瘡人
有まハ何斗と云。丁飯出来は也。家毎者ハ
粥を多く煮て介抱の丁寧あり。梅子云る
也。貧家と云五合一升の粥を毎日煮さかハ
取。如斯安理し。強く飲しむ。故も皆食
滞或ハ吐吐の患起り。外の病を引出する
有。土地の習をく。あまハ醫者の詞を不用
他國ハ珍しき夏也。下略。西游記續篇卷五
文政五年の其本邑篁後卷文助ありとの癘

を憂ふ六月廿四日潰く二鮫魚有り濃血は
隨く出づ癰又稍く愈其子茂平也や
こて是を語ふ文助問ふり答て云く信也
其長サ寸餘尾有りて首取鱗鱗并全
く常は此魚を好む其沙多きを以て皆頭
を去は然共己は不食夏數月今出て鮮也
且全きは何ぞや予文助の詞を冒て倍其異
ふを嘆す夫熟して後是を食し糜して
是を咽いづくんぞ鮮且全きを得人や人の
腹中は食を受ふ處有り文何を脊より
して出ふ夏を得んや備中笠岡小寺清先記
と、管茶山筆のナラズ云

病原藥性の説 医師は病は一気の留滯より生ずと
云はるる有りん魚は水に生じて水は養を以て人ハ
氣を生ずる氣は養を以て人ハ也此説ははくひる病
一毒と云者有り是は通くくまきよやたとハ胎毒
結毒ハ人ハ有魚毒菌毒ハ物ハ有風毒陰陽
毒ハ氣ハ有は是皆毒共云べし 打撲顛墮ハ
て煩ひ火傷溺水を死しるカ劍の傷をうり
て命を損く過食よて疼ハ抑何の毒也や

米麥毒飲れは傷とる患はこれ毒とい
る人けり六河豚鳥喙の類其物多くて
毒とる一はあはれ病を生る物をちりて皆
毒といふも萬毒一病とて可也又葉寒温
ぬくと云説有りて説水をあけて汝性いふ
といふ水吞て冷といふ人沸湯すて河熱と
いふ人今説酒を奉て河と温といふ人
冷といふ人や人を驚く門戸を互人と思ふ人
ハ必しは復有るもの也 同上

蒲後中条村は三載と云者の下葉酒を好む

酒の有先一升を飲む忽呑たれ也又一升
を吞ふ悦て吞まると又一升を飲ふ若も飲
吞て折臥る其夜臥をる位まで死する外も
かゝる復有りや耳々して酒は小杯まで一日
半日も飲む不覺量を過積りては病を
あはれ大低大杯を吞むる量を一たび飲
のハ酒の力一時いふ出る事故に害飲是ハ
予數十年見及び人皆然と云れ共量を
過せむ大杯を一度飲の害小杯を永
く飲はさむと見へき人 同上

方也而後瘍匠之書未見表出之者豈不惜乎其法方詳見于註疏故今不贅焉

平安原瑜公瑞撰桂鐘漫筆

瑜之家有一祕書其書云奇意丸其原出於南都東

大寺初東大寺鍾樓有一大鼓自昔打以報時焉其

鼓古甚矣不知相傳幾百年也永正中其鼓皮敗也

寺僧因謀更張除去敗皮則腹裏有數字視之

則一藥方也不知何世何人所記也然以其鼓之古推

之則亦幾百年前人所記也蓋昔人珍其方之甚恐

傳授非其人而良方之永絕于世因書而遺之後

數見奇效屢贈妙藥西命曰奇意丸諸般病則

差廣至今天下之人無不知奇意丸之名者其原出

於鼓腔云同上

世稱後漢張仲景為立方之祖不知者以為仲景以前

醫方皆是單方獨用湮滅不傳其傳于今者莫

先于張仲景故以仲景為立方之祖其實古方書

亡滅獨幸仲景之書傳于今耳同上

雙子之生又有男女不同者男則必共男女則必皆

女然亦有不然者左傳記晉惠公在梁梁伯

壽之梁嬴生一男一女由此觀之似不必然也同上

○至仲景始有合和之劑此夫不然也蓋漢以前之方

雙生之見、實家以先生者為兄、据見也。文家以後
生者為兄、据本也。此即何休之說。見公羊隱元年
註。然以瑜論之、雙生之見、須以先生者為兄、何
則、雙生者、其始非受胎異時也、皆是一時受胎、本
無前後兄弟之分。若受胎異時、則產時亦當異時。
然古來雙生者、未見異時異日而產者。產既一時、
則受胎亦當一時。余有成說。同上。

弁列宛委餘編載、鼻之下口之上曰人中。趙孟頫云、自

此而上眼耳鼻皆雙竅、自此而下口既二便皆單

竅。三畫陰三畫陽成泰卦也。余載謂此語亦
有理。但以婦人言之、下有雙乳亦宜單竅乎。瑜謂

趙說固鑿、王不識其義、故稱之為有理。已夫。天

氣通于鼻、地味入于口、人中之地乃天地之中、故稱

人中耳。同上。

或下女、日暮、閨中入髮、梳之、如燈之照、

度子髮之中、如火焰之、

又梳以ハ

又由ハ、螢の多集り、飛散り、件の女を

志し、主り、詠ふ、家悉く集りて、見えて、

形、物のけ也、と、彼女を出し、

女をくく迷ひありきくわの何れも志する人
家の事と成く子孫世承へくるとを

代醉編一王行甫云く人象兄嘉甫申く衣を

とけむ常り火星まらびぬ又頭を梳む髪

髻中より晶災流落是は陽気茂熾の

驗也貴微有り有るハ壽徴也中山三柳撰 酬隨筆

近年南蠻より渡はる取らんといひて珍貴耳好也

名の藥共をもてまやまの薬とて諸病を治

をば指りていひて價を高く賣渡すかか奇

時かゆみ疾く有る高死を治す主た本と

思はるる夏もや藥ハ偏氣の物好く一藥と

病を治ししは又害をなす故り藥方

を立て君臣佐使ありて幸有りて五味十味組合

せて我病を退き身を養ぬるを好く露

人身ハ再ひ得る忽ちまた形以同上

大己貴命と女彦名命と力を合せ心を一して天下

を経営又頭見蒼生及畜産の爲り則其病

を療ふの方を定め又鳥獸昆虫の災異を攘

く爲り則其禁厭の法を定むるを以て今

至まて百姓感く恩頼と蒙ふと有り是日

本醫術の始也 和事始

按子大己貴命咒まにへて其身の傷けはを
療ふり蒲黄を取と敷散き其上うへ移うつ皮
海うみをくめくハ其傷元そのけがもとの如ごとく有あり 夏苗
夏記なつしづめ見みへきり我邦上古わがくにわがくにの医療いりやうの法はふ皆みな如ごとく是
類たぐひ形かたち々々欽明天皇十五年きんめいてんわうじゅうごねん百濟國ひやくせいこくより醫博士
奈率王なそりてんわう有あり絞しぼ陀た採と菜さい師し施せ德とく潘はん量りやう豐ゆほう固こ德とく
カ貢こんと日本紀にっぽんし見みへきり是吳國こより醫術
を傳つたふ始はじ也 同上

藥方日本書りやくほうにっぽんしの來きた良りやう金かね方ほうを始はじとす 同上

按日本國風卷にっぽんこくふうまき權けん稱しょう良りやう從じゆ四位し下げ度た會かい神かみ主ぬし經きやう麻ま

撰せん醫い道だう之の部ぶ所しよ筆へつ記き和事始わじし同文也

夫醫法の先このいりやうのさき奈な人ひときり支しの者ものハ漢土かんちの上うへ世よ神農かみのう伏ふく犧かひ

氏うぢの恩惠おんゑい也此二聖菜穀肉食にせいさいこくにくをの義ぎを辨正べんせい人ひと

生育じゆい此道このみちと教おしへり吾われ 日本にっぽんのむむ々々神代

を按おし多おほふ大己貴命おほおのきのみことと女め夜よ名な命のみこととカを合あせ公

をくて天下てんかを經營けいぎやう法はふ又また顯見けんけん蒼生そうせい及また畜

の為ためり則すなはち其病そのびやうを療りやうふ此方このかたを定さだめ又また鳥獸ちうぶつ昆

虫むしの災異さいいを攘人じやうじん為なふ則すなはち其禁厭きんえんの法はふを定さだむ

あを以もつて今日けふより至いたる百姓ひやくしやう咸みなく思おも頼たのむ

蒙ふと有筑刈好古貝原氏大已貴命免
おし元て其身の傷るを療ふふ蒲苗を以
て散し其上に卧しき後をさしひく其傷を
よの如く安し夏古夏記を見きり我國和漢
同轍神聖生物を憐みのふの仁惠大壯ふ哉
人其恩頼を戴き今日の性命を恙なく安んず
んば各知せん有へんば曾てきく

禁庭の盛ある典藥寮を設け醫博士をたて
攝神三河の職し任し

唐の本草の如く採りて其身原印城和麴法を講究

聖武帝の御時施藥院を立て民の病をめく
しふと有山豆仁惠ありや醫の字字書を
持たふし木ト段ノ字从匡从反音意擊手中声
言相應也醫反并兵器治病猶用兵相應
則止故假用之而不帶遂加酉字今之酉古
酒字酒亦治病之故也後世如巫字以類於
巫也巫亦治病自為家者故并以賤職稱焉
支那國周代醫官を設け漢世業を専せ
りり已來人皆古への道をとしふ後漢長

沙氏畧是を人々喻ふれしを普く世の惑を
解す不能遂りし医者を流しよと云ふの事あり
又其流風を承ふ我日本に傳来す其志の如く
欽明天皇十有三年西域の佛法渡りて後い
つゝ其風流り化し天下の匠人あてて皆頭
髪を剃り衣服を僧にす按ずはり大和の始
曰醫者の髪を剃はる其始を不知薩戒託
曰永享五年九月廿日

法皇御悩危急醫師負能法眼伺候をせ

有之れ也和氣系苗に有る是に依り考見あり昔ハ

武家の醫師多ハ僧のおせしを雅忠始て武
家の醫に准り剃髪し僧位に進みこれハ医者
の僧位に進む始なり雅忠ハ足利家の末
世の人ありん云云是に依り推量ある事法に
負能已前ハ髪を結び僧態ありは古又を其
後滿天下の醫人唯僧態を専と出方の事非
を神聖の初をありのひり仁惠の趣をせ
察せむ各醫を以て一家の専業とす

以て僅一葉一術と禁秘とく口傳とく家法
とく人と共は是を行ふるをせざらん豈所謂行
同倫と云ふものありん哉若夫自己の微幸あ
つて又病家の幸何りて兼を授け驗を
得る度く有るはとや其身を軒岐の如
く思ひ自媒して其術を街ひ賣り殆以賤
業と云ふ源遠して末益をきいつる昔の
醫法と不正遂に医家者流とあは京師と良山
後藤先生お由者有數千歳のトよは生きた運
か解る夏も時節の醫法を授け及増態を見
て

はせぬ自螢雪の勲を勵す千慮並想遂
に是を覚悟しひ幡然として髪を結ひ縫
掖を着し兩劍を帯び古の風儼しし名を左
一節と改め道のおよ行たる徳必有隣天下
の医生靡然として其風義を慕ひ髪をや
しお者十の七八あるに於て世の人医の髪を結
ぬるを指し後藤流と云嗚呼先生後古の
見識大形哉と云ふことありんや其医法
たぶや始て一家の云を建つ曰九欲知医者

先察庖犧起於義皇菜穀出於神農取法於
靈素八十一難之正語捨其空論雜說及文義
難通者涉獵漢唐張機葛洪巢元方孫思
邈王燾等之書不惑宋明諸家陰陽旺相存
藏分配區々之辨識百病生於二氣留滯則思
過半云右九十四言詳形說後藤家著書有
ふ事長く略く也爰に只大意を述ぶのこ凡と
無限の云ふ士農工商皆也程伊川曰病臥下床
委之庸匠比之不慈不孝事親者不可不知医也
此語を以て知医の大
意を略す也其意は父母の病を以て知医の大

有時は自身醫者の一隅を以て不辨醫人の良を
不知識て天下の爲すはくはく大切を以て父母慈
愛を以て子弟の性命を以て凡庸の醫者
委任せしむ顧るに父母を以て不孝子弟を以て不慈
の大成也事親者に医を知らずんば有るべし凡庸也故に
先師の門に入向の人士を以て知医有り農を以て知医何
し工商を以て知医有り士農工商各家業を勤く
醫を兼知はくはく復也先師言曰知醫亦修
己王侯士庶皆以知医非必為業耳又曰夫有

形不能無病有病不能無醫醫者治病之稱而非
業之名自天子至庶人皆所當知而周設官漢專業
以來人失其傳不復古道徒知使業者治之不知自
識而使之治也醫難知乎哉欲知自知之美其必有
前論也如周漢之醫之官職家業と形
人、自知医夏北疏畧子て病ハ医者の治むカ文の
者と公得伎業と出者をつくは之てしを知らて
自是を修むるを知らぬ也司馬光諫院題銘
名記古諫無官自公卿大夫至士今商在不得諫者
漢興厥後始有短官との復有り乾師の詰医監官王

と云々如其自知の公先師必人をも勸て学文一
むつりしき醫書を讀て醫者よかれりと云は不
ハハ凡人皆父兄有り妻子有已身有り孰
疾煩ひあきまも有らば只養生医夏を公得
人よ常にたゞ其言を聞おくあはば父兄妻子已
身の疾自良医を撰んで委之天形過ぬるべしと
也其内士農工商共家業の暇有り学文を心掛
け人形ハ猶更の夏医書を讀良医を渡りて
一医を嗜へる夏也彼世上女子の方書を讀み

やと云んハ治療を玩ふ類を匠心有人と云是等ハ
却て孝友を外し方術ヲ害有換へ先師を医の
公中ニシテ類リ有る共ニ養生の術を公得良
醫ヲ渡リ疾煩の時迷惑せしむるを云也漢書ハ
と時の談を奉く病有る後を尋ハ中医を得由と
云へり此公ハ世ニ良醫ナリ故リ其病ニ適当せざ
ば藥を用ひ是を服し却て病を益々多クハ
病有るを瘳はざる中の医を得由也是又知医
の一助と成へ今夫も医を業とする者ハ尤詳
ハ生理の理ハ詳ニ其情ハ也古人ハ良相ト云
人を良醫ト稱ふと仰ふも多クハ能く心を用ひ
之ハ有るは去上古神聖の医法ハ簡略ニて
不妄素問靈樞八十一難等の諸説請我へき者
有空論拾べき者有熟讀玩味且後し是を
取捨せし降つて漢唐の世ニ至り藥味方術ハ
詳也聲言ハ馭馬の河水を涉ばり如く件の群書
ハ涉り獵師の鳥獸を射る如く良法を將
也其外何ぞ博く医方の書ヲ涉獵し彼共
参考行住坐臥医の夏冬の思辨して一病人を

預りても隨う能ふを移り治療を施す必衆
明諸家陰陽配當區々多は医説よまると復か
かぶる百病生於一氣留滯是蓋孟子浩然
の氣養の理及古語の流水ハ不畜内戸樞ハ不蛀の
義ヲ取まると其心ハ人の天地一元氣の中ニ生じ
也恰も奥の水中ニ在り如く奥ハ此氣を水ニ呼吸
し人ハ此氣を食物と相改き蓋人体ハ即小天地
の上下内外此氣の順行以生育せざるハ敗し志
有れと順行を以常とせざる若し時有つて留滯
是項其病ハ肺ヲ捕翳ハ其聲ハ咳ハ汗病也
の空氣依然として不行迫聚して形をたして日凝
月積遂に為疝為癥長く百病の禍胎を
成せ其始一草芥の滯は其義甚微也心を用
ひてやく掃除する時水道さつらりとて水一
滴も不滯り如く是故に人常々飲食を節はし思
慮を不凝動作を静まし酒色を淫涵せざ
利欲を寡く所謂配義与道一氣自順行
して戸樞の不蛀り如く疾病ハおふる處りさ
ハ人への世は交り善よしはきし劣り一氣の留滯

と仰らまは百病生於一氣留滯とのたまひし首尾
の公豈忠告仁惠玩味をへき復も非也不佞
先祖より至今元八世相傳へし医業を以ていり
ふふ天の幸福やの法明師の門に遊ひ兄弟
三人皆知医論を以て受か得たり於是前日逆惑
劣外の陰陽分配をまふふ復も復も且豁然とし
て誠は夢の覺をりり如 山豈生涯の大快事か
らばや今海内七八先師の風を倍を正はと雖猶
惑其國の法令をりり如 劍髮僧衣あるは医者
新板の如く或は海内七八先師の門に遊ひ兄弟
風義を辨きりり其姿服を以て医家者流を混令
は國をりり是有嗚呼歎かき復も復も殊更
先師の人諸侯の國を分ちたり者各録を以て
知医の趣を大守の聴に達 益世の爲を以て
廣くありて本朝古代の風儀を傳へりて
き亦輩を以て深く望むる也 下略知醫論
赤沢正介ハ備後尾道人後京師後名元一受業
醫術世に行はる浪花を以て佳文化六年卒知
医論一卷隨筆若許ラ者ス

神曲を造製せしむるに六月を用く製せし乾き易

きをくと思ひし子 諸證辨疑云 荑山吳 六月六日 球撰

謂諸神集會之辰故名神麴如過此日造者非神也 云云

親康松軒語予曰本國寺僧覺圓者年四拾餘患

楊梅瘡遺毒舌上腐爛青黑色自春到其末

舌全脫落漸及咽門不能飲食仰臥開口齒流灌

稀粥衆医技窮自用土茯苓十錢補中益氣湯

一錢相合服之及半年余舌全生如故是甚奇

百濟氣丹水子名古屋玄醫者

不易の戒あふん予養生の術名醫方考の

中の一論を用ひ曰何解陳留人也一日與河

南尹樂廣會飲于趙僧武宅酒至數杯

忽見杯底有似一小蛇嘆之入口亦不覺有物

但毎思而疑之日久覺心疼自思小蛇長大

食其五藏醫藥不愈久之又會酒趙宅終

執杯又見小蛇乃置杯細視之見趙宅梁上

有角弓却是弓稍影于酒底因此解疑其

疾遂在此以精疑而病必以疑解而瘥向

來以藥治之皆無驗也と有り（一）又云乃此
丸小瓶に見譯りおむかくのいよく公を苦しめ
ふふと引くことし我く少くも神 知事談

西田國子診治之暇輒檢方書其秩已過六望七如
一日也疫中有一難治症國子偶得其治法於
多年焦思之餘人多就問其說乃謂秘之不
仁暴之不重與其不仁也寧不重乃國字錄
刊行世蓋省若問之煩且欲人之易讀也嗟
有此誠心宜乎戶外之屨常慎而仁者之壽

疫邪木屑說

西田耕耘述

疫ハ役也徭役ノ如ク沿門蓋境衆人一般ニ病ムヲ以テ

疫ト云フ疫ノ名シル種々有ト雖ミ劉奎カ說疫ニ

七十二疫ヲ詳ニ舉タルハ爰ニ委ク論セズ此ハ述ル病

家ノ為ニ其大槩ヲ示ス也夫時疫ヲ溫疫トモ又疫

癘トモ云々之ツクワケノ有リナレト總テ流行熱病

ノ一ト心得ヘシ此病ヒ傷寒ニ似レ凡大ニ異ナリ傷

寒ハ冬時嚴寒ノ寒邪ニ感シテ病ム者ナリ疫ハ

天地間ノ穢觸ノ惡氣世界ニ流行ス其流行ス

ル筋ニ住居スル人口鼻ヨリ呼吸ニツレテ腹中へ
引コム病ナリ譬言ハ江河ニ柿渋ヲ流スニ其渋流
レ筋ニ居ル魚是ヲ吞テ死ルカ如シ故ニ疫邪ハ一
國一御甚シキハ滿天下ニモ及フ者ナリ疫ノ行ハル
多ハ久旱饑荒ノ歳或ハ戰亂ノ跡ナト天地ノ氣
不順穢濁ニナレハ必ス流行スル者ナリト医学六要ト云
書ニ詳ナリステ天保七年丙申ノ比ヨリ何トナク歳運
ヨカラス司天在泉大過不及アリテ其翌年饑饉ニ
テ疫邪行ハ庶民大ニ憂ヘ其後トテモ五穀十

分ノ量難ク流ハ右點ノ行ハ風邪ノ世ノ怪症ニ觀

氏氣モ付カズ有シカ弘化丙午ノ歳諸國ニ自然糞出
來タル比ヨリシテ世上疫邪流行專ナリ病人ヲ診ルニ
大抵同症同脈ニテ日々數十人診詠ヲナス一累日凡
ソ數百人ニ至リ始テ疫邪尤夏ヲ知テ萬方治ヲ盡セ
共寸効ナレコヲ以テ寢食ノ間モ其病根ヲ推究シ下脘
ヲ折テ勉強スレト解セス或日夕ノ趨養葵カ温病
尙病トノ説アルコヲ憶出シ讀テ後諸思黙想シ
稍其病根ヲ悟ルニ似タリ矣ニ數百年來罕有ノ
疫ナリ其病源ヲ述レハ傷寒論ノ温病ニ彷彿タ

ト大ニ違ヒアリ傷寒論ニ云温病ハ其病初テ發
スルヤ惡寒セズテ發熱シ渴スルヲ温病ノ準的
トス勿論人ニ傳染セヌ者ト心得ベシ

夫疫ハ口鼻ヨリシテ入ル尤モ其ノ疫邪ニ清濁ニツアリ
厲瘴毒霧ノ屬ヒ氣ノ輕清上浮者ヲ清邪ト云
病ト入テ上分ニ著ク濕土汚穢ノ屬ヒ重濁下凝者
ヲ濁邪ト云病ト入テ下分ニ著ク方今ノ行ハル疫邪
ニ感スルコト多ク冬月ニアリ最初ハ輕証感冒位ノ夏
ニテ格別ノ熱モナク食味モ不復ス服藥モセズシテ
而モ自覺ニ全快セズル心身覺也其後少自補則ハ微少

キタル心持アリ或ハ立ちウラミ足腰筋ハリ疝氣ノヤウ
ニモ不覺又ハ環跳ノ宛ヨリ足サキ迄筋引ラツ
キシヘズ腰ヒユル者也元ト觸レ感シタル疫ハ督脉十
四推下腰間ニ着附ス腰ハ腎ノ府ナリ腎ハ冬旺
ス陽氣閉藏シテ精ヲ腎ニ飯スレハ水以テ火ヲ制
スルニタル終ヒ邪入ルトモ深ク入ルコトヲ不得前ニ云フ如
ク輕キ風ヒキタル様ニ思ハルモ此ノ故ヲ以テ邪入テモ
即時ニ熱ヲ肌表ニ發セズシテ淹留シ遂ニハ其熱
ヲ肝經へ傳フ肝其熱ヲ受テ釀シ鬱熱日久シ

シク春ニ至レハ肝木旺シ腎經ハ時過テ腎精次第ニ
煎熬枯渴スレハ内ヨリ表ニ発ルテ不能肝ハ閉塞
ヲ寒惡ム春陽升發ノ時カ又ハ中暑或ハ勞役
過度或ハ心気勞倦ノ時ニ當テ初テ肝經鬱熱
疫邪ヲ喚出シ共ニ肌表ニ發達スルナリ因テ竊ニ
名ツケテ疫邪木鬱症ト云フ其証惡寒、發熱、
頭痛左脉弦ニシテ左リ臍傍ノ動気カフル鳩尾
ヘカシ込ミ痛ミ気急息迫或ハ吐気有テ食ヲ
不受怡モ脚気衝心ノ如ク思ハルナリ肩背ハヨリ
解亦甚有ナリ

欲就一死ヤウニ思ヒ落涙ヲシ聊ノ音ニ驚キサノミ
憂ルホドノ憂テモ無キニ深ク憂ヘワツカノ憂ニ嘔
沮物更ニサキクリシテ望^{ナニモ}慮^{ナニモ}千慮百懷夜ハ深更
ニ至テ目サヘテ安寝ヲスル復不能耳鳴ソリク歯痛
ミ左眼生翳小便淋瀝シ婦人ナレハ倍ニ云フ消渴症
如ク平素雄壯ノ大夫ト雖モ此症ヲ発レハ昏々然ト
シテ憂心不伸者ナリ女ナトハ^{ナニモ}温^{ナニモ}結^{ナニモ}花^{ナニモ}再^{ナニモ}トシ勞
瘁ノ様ニ見ユルナリ此レ疫邪木鬱正面ノ候ナリ其
餘ノ疫証千變萬化定ムヘカズ疫邪初テ発

ルニ傷寒ノ如ク又始ヨリ陰症トモ見ルアリ油断スベ
カラス或ハ惡寒振戦シテ熱出テ瘧ノ如ク間日振
寒スルアリ微気又ハ小便淋瀝茎中疼ニ白濃汁
米泔水ノ如キ者出テ腰間寧子急シ下疳瘡ノ如
キモノ出來骨節疼痛屈伸ナリカシク手足麻痺
スレハ脚気ハ肝中風証トモ見ユルアリ或ハ癩斑疥癬
ノ如キモノヲ發シ又ハ遍身面部マテ楊梅瘡ノ如ク
發ルアリ此ヲ楊梅瘡ト云或ハ全体へ瘤ノ如ク出來
ルアリ此ヲ疣瘡瘰ト云是皆疫毒ノ倍稱ナリ或ハ
刺疾ノ如ク最急徵數種ヲ瘡ト云此則ニ瘡ヲ楊梅瘡ト云

凡ソ邪ノ行コト水ノ如ク唯窪カ所ニヨル者ナリ其人平素
ニ持病アル者其ノ所ニ邪毒附著スレハ種々姿ヲカヘテ
病ト出ツレ凡脈ヲ以テ考レハ大抵同脈ナリ變証種
々有テ醫師モ凶莽ニ者過シ徒ニ証ヲ見トメテ
ノ候証ニ拘ラス治療ヲナスベシ或ハ下利水腫咳嗽飲
食不進等ノ証ニ至レハ雖盧扁亦在所施術矣
治症方

奔氣湯外臺 柴胡桂姜湯傷寒 加味逍遙散醫貫

延年半隻湯外臺 除濕達原欠說疫 生芩根湯千金

平肝解鬱湯 自製 芩加半生姜湯 傷寒 竹茹溫胆湯 壽世

柴胡竹茹湯 匡約 半浮心湯 傷寒 七聖湯 彙補

大柴胡湯 傷寒 指迷七氣湯 直指 滋陰降火湯 大還

茯苓湯 楊氏家藏方 九味清脾湯 壽世 越脾湯 全匱

禹水湯 本在後驗 陽毒升麻湯 千金 陰毒甘粳湯 同上

醫貫曰升麻甘草二方與傷寒論陽毒陰毒持吳

之故記之是感天地疫癘非常之氣沿家傳洙所

謂時疫者是也

藿按ニ平肝解鬱湯ノ名故人同名多シ西田氏自

撰セテ方ニ竹茹温胆湯愈効ヲ示シ方ナリ生々病者

危ニテ藥ハ邪ナク神ノ所業ニヤニ依テ藥ニモセヨ呪

禁ニモセヨ其病ヲ療サウトテ致ス一ハ正直キ神ノ

御冥ニ依ル一テ病ニ苦ラル、人ノ信シテ是ヲ受ル

時ハ其信ル処ガ即直キ神ノ御冥ノ相應スルニ

ヤ依テ病ノ瘳ルモ尤ナ一テ中略或人ノ腹痛ニ

襟ノ垢ヲ丸ニテ是ハエシリニアニカニタニト云藥ジマト

等キヨシニ欺キ与ヘタルカ其人大ニ信ジテ是ヲ吞テ

其病ガ即座ニ愈メト申ス一有ト云下略不志都乃石

室一名医道大意大壺平田先生講說門人筆記

三日コロリト云病文政五年壬午秋八月下旬ノ比ヨリ卒
病發シ其症吐浮腹痛惣身微冷面白忽衰シ
脈絶煩悶甚シキハ人莫ラ不知朝ニ發シテ夕ニ死ス
或ニ三日シテ死或ハ五七日ニシテ斃ル者アリ人名テ
三日亡ト稱ス其九月ニ至テ專流行シ歿スル者益ス
多シ十月下旬ニ至リ流行漸ク止ム其始治法ヲ不知
只頭症ニ從テ暗ニ藥ヲ投スト雖更其切ナシ且吐
シテ下利セザル者アリ不吐モノアリ吐下相兼ルモノアリ其
盛ルニ及テ陶氏ノ玉衡李普東ノ治法要略是代
温流文翰ハ倦意精寒相兼入門并金針外傳並和蘭
不過茲ニ凡僧ノ医理ヲ不知猥リニ刺絡シテ害不
ナアリ予考フルニ此病沙蟲ノ毒ニ非ス元敗液内
攻ノ毒ナリ如何トナハ其秋彼岸ト雖モ天熱ル
三伏ニ倍シ六七日ヲ経テ降雨三日ニシテ乍大涼ヲ
催ス此時衣服飲食適宜ヲ不得者強弱トモニ
此病ヲ患フ其輕者ハ吐浮スト雖四五日ニテ治スル
者アリ其重キニ至テハ藥治ノ及フ所ニ非ス是則敗
液内攻ノ毒ナリ因テ再ヒ起元ヲ考ルヘ察ルニ冷氣
ノ為ニ汗管閉塞常ニ人身ヲ生ニ育滋養ニ終

ル所ノ勞敗液送管ヨリ表出スル復不能加ルニ雨
湿從テ襲入シ敗液ト共ニ人身固有ノ血液流動
ヲ妨ルカ故ニ其衰挙テ數フヘカラス予ガ勞敗液
ト称ルハ鹽水灰汁脂油土質^{ツチ}質^チ硫黄等也尿道ニ
著留スル時ハ淋瀝ナシ腸中ニ著滯スレバ下利腹
痛ヲナス夫レ肝藏膽存ハ常ニ硫黄氣多ク其毒コ
レニ著ケバ弥鬱敗刺刺ヲ為シ其衰症極リ無キニ
至ル是ニ因テ治療モ區々ニシテ附子人參ノ温補石
羔ノ清涼自己ノ欲ル所ニ隨ツテ切ヲ得レハ是ニ倚

類傳建和料經之毒瀧記此毒最劇切得レハ是

各治療ニ全キ復ナレ予カ回生ノ治法ニ於ル左如
シ腹痛吐瀉スト雖^レ其物惡臭ナク額上冷汗口
舌温リナク脉絶ント欲ル者ニ換胎湯ヲ与ヘ兼ルニ
射香龍腦丸ヲ用ヒ不日ニシテ治切ヲ奏ス蓋シ此
症腐敗ノ物未血液ニ及ハズ腐敗セシ物ハ腹痛
ニテ其吐下スル所ノ物腥臭酸氣殊ニ甚シシ其病
者面白黄色或ハ灰白黑色等ニテ其淺深ヲ診
察シ各血液鬱敗粘調ノ輕重ニ隨ヒ甘硝石
精二三滴ヨリ五六滴ヲ与ヘ次ニ硫黄花鬱金或

六牡蛎枯凡各ホ分ハルサムコツハイハテ以テ丸トシ四
五分ヨリ六七分ヲ用ヒ煎劑ハ清涼至宝欠テ互ヘ
テ全快スル者數十人依テ之ヲ見ルニ先裔敗ヲ仿
クヲ以要トスベシ下略 経験日新録浪花奥田真五平著
藿按ルニ三日コロリト呼病此ノ時ヲ始トス病体治
療筆記セシモノ未見今日新録ニ其大略ヲ筆記
セシ故爰ニ抄録ス此ノ後天保前ニ三日麻疹ト云モノ
流行セリ予若年ノ時讃刈高松ニ滞留飯路十
月九日播磨赤穂着船夕方御崎ヨリ上陸赤穂
感下加増権也柳川南郷其地ニ至ル生來市野

予其故ヲ問フニ主ノ云大坂ニ三日コロリト云悪病流行
シテ其宛ル夏敷ヲ不知当地ノ者モ多ク感シテ先シテ
飯ルモノ日毎ニ敷ヲ不知位ナリ依テ國君ヨリ歳改
ヲ仰舟ラレ正月年始ノ模様ヲナスリ明朝ハ雜煮
ヲ祝ヒ可申旨且長ク当処ニ滞留有リテ必大坂エ
テ寄不申直ニ飯京有ヘシトテ懇切ニ申故ニ霜月
下旬迄滞留シ至夏ニ飯京セリ赤穂ニテ病ノ様子
尋ケレ凡不分明飯京ノ比京地ニアリコ爰ニ此病人
有リテ不治者有リナレ大坂程ニハ流行セス餘

珍敷終爰ニ贅ス

三日麻疹ハ麻疹不異三日目四日目ニ起居モ出衆

面部ノ腫モ散シ咳モ止マ速ニ平快セリ予モ數人

治療セリ真ノ麻疹ノ如クシテ日數早ク治スルナリ九

月比流行セリノ主方煎九ニテ大低治シテ

一匠便敗毒散方後曰飢饉兵乱之餘飲食不節起

居不常致患時行瘟熱病沿門闔境傳染相似

宜此方 世醫敗毒散ノ去人參ヲ九文ト称ル所以ヲ

一説ニ人參敗毒散ノ去人參則為九味九味敗毒

散其方有信ヲ敗毒散ノ去人參則為九味九味敗毒散

差異アレ凡局方匠便等ノ方ハ十一味也人參ヲ去リテ

モ十味ナレハ九文トハ不可称或老医ノ説ニ曲直瀬道ニ翁

天正年中瘟疫流行シ貧民疫死スルヲ憐シ敗毒散

ヲ施藥セラレシニ方今ト違ヒ人情實朴ナル故謝儀

ヲ不酬メ施ヲ受ル事不快トテ請者女シ翁此復ヲ

聞テ不得已直カシヲ九錢ト定メラレシニ其日ヨリ藥ヲ請

フ者蟻ノ如シ貧民コレガ為ニ死ヲ免レシ者數万人ナリ

來一溪翁ノ社中九文ト異名シタル復今ニ存スル也下云

杏林内省録備前岡山緒方惟勝義夫編宦医之
部其他數条有之其二ニテ致ス尚原書ヲ見ルベシ

身はあそびの通海身をいふときう楽をいふとき
心はあそびの根をいふときうくとき

續後撰集本草をいひし見くときあ丹波経長

とく置きのよのよをいふときあ四方はあ本の公をいふとき

此本州の圖経をいふとき

新千載集惟宗時俊朝臣

郭公はあ限の有りよ志のいふときあ初音をいふとき

是醫家千字文の作者ああ作者部類下野守良

俊子とああ醫師の詩歌上古の事知あああ記籍に載ああ吉田耳之初とあ詩に懐風藻に見ああ集に見あ

先ツ至り皆御前二伺公シスニ院重吉ニ此山心葉草有ラ

ム汝等採來レヨト一統御請ハ申セ凡席ヲ起スルハ兩人ナリ

福井近江介ハ二十余品三角典葉少クハ七八種採來リテ

奉ル其後播紳家御医ニモ播鞭学ハ不知輩多シト言玉

ヒレ君ニ仕ル時ハ如此ナレハ播鞭学モ覚悟セズバ不可有也

續日本記曰天平寶字元年冬十一月癸未勅曰如頃年諸国

博士医士多非其又訛諸得選非唯損政亦无益民自

今已後不得更然其須講經生三經針生者素問針

六經明堂翁草栢執寛政二年大存御医師中工御汝汝書寫

大同医式畧記 大同三年奉 勅施行者治永元年典藥

一 医官不許使家僕直得異邦之藥種

一 醫官每朝寅時獨考自脉知日氣而後參仕

一 君上御腦之間医官不許房中之事犯者解官

一 医官診女官等不許直問病根

一 御惱之時選医而令御藥上之群医有異考則

雖夜中可申之

一 医官之家不許突居遠所

一 分量可以類聚方為規不可猥用異法

此御藥所許以異部之書為本方先考本邦之書而

御惱之時禁酒

御惱急時不應召者解官

一 医官可握蘭

一 医官可一忌仏及逢僧尼之日不參仕

一 医官可學達陰陽之理

一 吾朝古為医者戒制アル及如此今時多ク仕官ノ

一 医八宜記載

醫癖論

東都池田瑞翁撰

醫之治病非用藥之難認症維難而得其中最

難矣况痘之變症如反掌乎必先知藥性之寒熱
溫涼詳君臣佐使之意明合藥一方之主治能察
症之寒熱虛實分四節辨八症慮性重緩急而後
應其症而用其方則葑菲不中雖然醫之心亦各
有偏癖或好清涼或好溫補或好攻下甚者好
蘭方貴竒藥施異術其於所好者不能不癖欲
矯其癖亦甚難矣狐傲尾之大猿眩尾之赤帷古
人亦然刘河間張子和專用寒涼錢仲陽多用解毒
陳文中偏用熱藥魏直聶久吾偏于溫補費建
中辨毒散下論而論自負其偏以笑也之偏丹溪之

可謂難也朱巽曰唇舌固用藥樞紐也柅紐在乎則
縱橫顛倒自我出夫未發之中可學而得已發之中
非熟鍊則不可得而一匠一偶中而得効則終身守株而
待免一遇瞑眩則憊於羨而吹鑿兮朱巽曰可清也
可下也苔之黃白盡之美可溫也可補也古之紅淡盡之美
藥隨病更機非在我可謂萬世之龜鑑也世醫多守
株吹鑿者故藥隨匠更其機皆在我也或專立運氣
之說曰某歲水尙勝故多用熱藥溫補某歲火
尙勝故多用寒涼攻下古之名匠皆遇其時而用

其藥若易時則皆然焉余療痘殆五十年雖數
遇歲氣之變未嘗知如此之甚諸舉一痘症論
之一匡曰可下一匡曰可補一用犀角一用人參或用
反鼻或用紫圓同一人之症而用藥如此異同者非
癖而何也用補藥而增熨生苔用下劑而其下利不
止是皆匡之誤也大凡之病以補者之眼視之疰少不虛
以攻者之眼視之疰少不實遂至工於厚者拙於補愛
補者惡浮而陷於其所好矣不治己之癖而欲活人之
病安得無失乎不偏不倚謂之中嗚呼難哉得中

道藏書一已... 醫部全錄卷之...

右一章安政己二月先生予力宅ニ入來終日閑談痘ノ
治療ヲ質問セシ折ニ此癖論ヲ認メ予ニ示サル同三月
飯存時ニ齡七十二

阿列安東利左衛門ト云ハ友人ノ祖母三十三歳ノ時甚積
聚子疼めりき... 有病の者の隙を伺ひ守り乃ち以
て疼むまを初破り腸を引か... 人を呼ぶるべ
告し... 皆人驚顛... 頓く外臣を招き腸...
積を切捨則腸を... 療治... 遂に平愈有
りて今八歳と云病... 彼積ハ七日の間

ぶくく動きし後ハ小人少くの如く事々々
新著聞集

肥後國豊後日向の河ノ南に極山中に五ヶ村那須村推
葉山并宮ふと極山中也安永の比病狼野出出く
人を害せし不日ハ數百人疵を蒙りり古領主医
師を乞ふ瘡治せしめられし疵ハ健多し小兒杯
くと女くと疼復好し此地塩を不取故也又狼毒
疵口ヲ集り居し疼不覺るも也最不思儀形
と 北窓瑣談

三葉國... 瘡... 有... 瘡... 有... 瘡... 有...

ぬき分けハ皆死也也 只石菖根一味煎し洗し
佐渡外科本多勇伯の語也 全上

醫術の妙至は者ハ扁鵲也大夫ハ... 醫を以て
扁鵲ハ如成也 医を以衣食を計るものハ術の
妙至は夏叶不可... 身の境界ハ扁鵲のこ

とく事也 同上

和泉岸和田領熊取谷ト云処ハ四ツ子を産泉而成

田元近物語寛政七年乙卯春ノ夏也 同上

医書の文傷寒論ハ平穩... カ有奇妙の作儒

書の中より其類稀也素問文ハ玉石混雜セリ然
共其全体他の医書の所及ニ非其外後世ノ医書
和漢共ニ甚不文形ノもの也但賀川子女の産論
畑柳安学範の二書文章甚佳也 同上

夢溪筆談ニ官者陰莖取ル故ニ髭不生女子ニ
陰莖おき左リ髭無是男子ハ腎気外ニめケル
髭ト陰毛生モ陰毛ハ腎気の主ニ取ル也ト云今
日本ニ宦者無故リ其夏ヲ不知是等ト醫理
の一の考ニ備フべき夏也 同上

且來先生病甚後時ニ至リ其諸症ニ於テ其病ノ極ニ至リ

我滄拙手の能事ニ於テ非ト辞セシム但徒トモ
ウあつキ今都下の醫師數千萬を以テ數少ト雖モ
危キ時ニ臨テ先生を託セヘキ人ハ稀也昔ハ名是
ニ医学ヲ人ト彫クナリ也其ハ術ト拙キ也只子の文
学ヲ好メ先生ハ命也云々云々云々云々云々云々云々
云々三英聞テ先生昔を以テ云々云々の殊ニ明の代
ハ医ト多く明人の中ニイテ准如キ物を得テ先生
の死生を託シのふヘキ試シ云々人但徒暫思惟
テ辞立斎リ如キ者ヲ得ハ可也ト云々三英不

思手を弄して大に笑先生ハ誠々天下の豪傑として
学問文才誰有て能南うんさん少く深く字ハ
のりきれるハ愚也と云へー三英不才成と雖立
育如ハ讓はべのり薛氏如も足きりとの
たぐぬ今の世と雖其人より乏うん少く何ぞ醫ハ
きを夏へん先生の見のふ処ひくしを笑ひぬ且
醫者たるもの持へし書藉ハ内經本草傷寒論の
三部也此三部ハ生涯讀へし書也古今の医是を
外より富ハ医学と云夏形一板餘財と有ハ千
金亦財の二詩也海神は神は瀕也許並ハ方彙
外傳共之へ仲景のを今より多う多し其外古
今の医書汗牛充棟かろくはま山人のり大くハ
古今の秘書の如き物也偶一見解有書と僅々古
人の一斑と伺い得たりと云へー一遍ハ眼を觸る
とじ讀さるる亦妨形一日上

五疇

古有五方蓋以五色象五疇一曰青龍湯 一曰蒼龍湯
二曰白虎湯三曰朱雀湯 一曰朱鳥湯又曰朱鳳湯又
曰十棗湯 四曰玄武湯 一曰元武湯又曰真武湯五

曰黃龍湯一曰小柴胡湯

續善堂隨筆一名技癢
錄二卷文化元年梓周西國

南部彝伯民著

醫者十四不可

今之為醫者有十四不可焉恃學而疎術一不可也
主意而味法二不可也年少而度思三不可也年老而
唯夏四不可也護身而道危五不可也見利而忘仁六
不可也輕生而寡惻七不可也畏死而多慮八不可也
厚富而薄貧九不可也慄賤憚貴十不可也拘例
而失權十一不可也趨變而惑常十二不可也巧言而

抄并取原集六言七言集卷之六知六不可也同上

多其言云凡脚氣病之患人固ヨリ瘀血アリ然後ニ
風寒湿ノ氣ニ感シ相合テ是症ヲナス右ノ脚氣ハ卒病ニテ
急死アリ今ノ脚氣ハ緩病ニテ死者ナシ若シ猶ニテ懷症ト
ナリ數年延及シテ羸瘦胃弱ニ至テ故死ル者アリト云ヘリ
但脚氣ノ氣ノ字鄙俚ナルヲ改メテ脚痺トス今是ヲ按
スルニ太冲先生ハ大ヲ遺シテ小ヲ録スト云ベシ千金外臺
ノ脚氣ノ根據トスヘキ書ニ錯乱謬說而已ナルヲ遺漏
セシハ先生ノ智力未及ヤ又ハ前說ノ籠罩ヲ免レサルヤ
風寒湿ノ字ヲ契脫セサルヲ視レハ前說ノ為ニ倫昏セ

セルナリ且ヤ脚氣ト云名ハ方倍ノ名ナレハ鄙俚ハ固ヨリ答
ムルニ足ラス九医書ノ鄙俚ナレ勝テ答ムヘケンヤ又此ノ義
ニ就テ大段ヲ誤ル^ト有凡名ト云物ハ実ノ賓ニテ名ニ因テ
其実ヲ認ル^ト夏^ニハ本名ノ脚氣ト云ハ鄙俚ナレ凡外ニ紛
ル^ト義ナレ此ヲ以テ其疾ノ情ヲ不失切近ナル方倍ノ試
驗セル^ト脚氣^{アリ}今改^メテ脚痺ニ換ル^ト片ハ雅名ニハ脚^ニ
レ凡其疾ノ本色ノ実ヲ失ヒ義ニ於テ紛ル^ト多^クニ竟ニ
亦前^ノ訖ノ風毒湿痺緩風ト云ヘルト^ト痺^ヲ同^スフス是^ヲ以
テ先生果シテ治法ヲ述ル^ト風寒下水ノ治ヲ出ス此^ヲ加^フ
セザル者有ニヤ安ソ知ラ^ズ血ノ流スルハ平素固有ノ物ニ非ス
シテ邪ニ感スル^ト後邪ノ為ニ瘰癧^ニ瘰癧^セル^ト夏^ニナル^トヤ楊大
受^ク云瘰癧^ニ已^ニ成^テ盛^ル者ハ惡血ヲ殺シテ其重盛^ヲ去
ルトアリ是既ニ大冲子ニ先キ立テ鳴ケリ然^レト^モ楊氏ノ瘰
疾ト云ル^ト大ニ非也ト云後血ノ夏^ニ没^シテ説カス自家^ノ唾
針ヲ奉^ク取^リ罔^ト謂^ヘキ或^モ其他^ハ素問ノ厥論ヲ本据
ト^シ或^ハ痺ノ名ニ執^キ抑^シイ^ツレ^モ前説ノ範中^ヲ脱^スル^ト夏
ア^クハス是以^テ其治法頗ル過^ス差^ス抑^ハ惟^ルニ外臺秘要
明^ニ瘰癧^ノ目^{アリ}但^シ其題目篇末^ニ埋没^シテ依稀

トシテ晨星ノ餘光ニ均シ是以古來此ヲ窺見ルナシ
千金方ニ在テ既巳ニ山嶺南瘴氣ノ題目ヲ亡失ス王嘉慶ノ
編輯幸ニ其舊色ヲ存ス嗚呼唐初以來殆二千
五百年歲月久遠ナラサルニ非ス然ルニ人ノ脚氣ノ瘴
毒ニ因ル夏ヲ述ヘ明ス者ナシ予ヤ何ノ幸アツテ初テ王
嘉慶氏カ傳ル処ヲ述明スル夏ヲ得タルヤ孫氏尚靈ア
ハ無何有ノ脚ニ領首スヘキ也 脚氣并正南紀九山元璋著
文化辛未序有リ
脚氣ノ脉沈滯ハ多死洪敷ハ生々爰ハ不瘵トモ差トアリ
屢是ヲ驗スルニ脉ハ柔子堅弦ニシテ數ヲ帶ルモ也和

五道 後 中 同 上

気道 血道 精道 水道 大便道

古林元祖ハ名譽高シ或人間テ云ク灸ヲスルニ惡日アリヤ又
禁穴アリト聞然リヤト問ニ隨分急度アル夏也素
人ニテモ覺エラカレ程ノ夏ヤト請イカニモ覺ヘ易シ惡日
禁穴唯一ツ宛ナリト然レハ何卒授ラレタシト云見宜云
年中灸スヘキ日ハ正月元日身ノ内ニ灸スヘキ所ハ眼玉
ナリト云シト一技ニ妙ヲ得タル人ハ識見ノ超邁如此シト
云 良齊問話續篇
藿按ニ後藤良山又香川太冲ノ筆記セラレシ

モノ内ニテモ見ス又近時南涯翁ノ言ハレシト筆記
セシ者ヲ見セリ何レモ古人ノ説ヲ自説ニ言ヒ傳ヘラシ
ナラム古キ処ヲ出処トセハ古林翁ナルヘシ

凡ソ人身ハ皆其先祖父母ノ遺体ニシテ吾物ニ非ス一髮
タリ共父母ノ遺血ニ属スレハ我カ身ノ養生ハ即チ父母
ヘノ孝行ナリモシ又主ヲトリテ奉公セバ我カ身体ハ主君ノ
物ナリ敢テ氣隨ニ任スヘキニ非ス然ルニ前後ノ慮モナ
ク酒ニ酔テ争鬪ヲ起シ身体ヲ致傷スルハ不忠不孝
ノ至ナリ是故ニ創口縫ヒ治スルノ價一寸壹兩ノ定メアル

此等ノ人慎ミ其痛ヲ價ヲ擲テ救ヒ然ト救傷ス

山豆外療匠ニ利益スル為ニ設ルナラニヤ是モ

台朝ノ仁意ニテ拜戴スベキノ至リナリ 松齊問詔 天野 藏人著

小児面腫奇症浪花頓度町川崎屋児面負腫気有
肩ヨリ首ニ至テ肉脱鷺頸ノ如ク心下滿右ノ腹ヨリ左
廻リ長サ六寸餘繩ノ如モノ手ニ瘵ス兩足腫ヲ帶小
便不通大便下利五行不能食脉微弱衰弱最甚
跌陽脉ハ不瘵九先一活ノ外薑茯苓飲沉香三
分刺姑石五分兼理中丸五厘ヲ用五日ニシテ下利頓
止十日ニシテ水快利腹滿隨テ消ス 經驗日新録

中風ト云病其名義ヲ不詳風ニ申ルト云ハ寒疾ノナリ

中風ノ症寒疾共云唯シ近代医書ニモ少々其説有

凡医家ノ説ヲ聞クニタシカナラサルヤウニ覺ユ予思フニ風ト

云字ヲ風雨ノ風トハカクリ意得ルニ因テ解シカクシ風

ト云ハタ、氣ト云ト見テヨシ或ハ心氣ノ疾或ハ氣血ノ

疾一身ニ充滿シテ運動流行スル者皆風ト云大塊

ノ噫氣其名曰風ト風モ天地ノ氣也故ニ氣ノ字ニ易

テ風ト云癩瘡ヲ大風ト云腸風胃風ト云疾アリノ白

癩風紫癩風ハ白ナマツ黒ナマツク也此等ノ風ハ

心風ト云諸病也、心腹脹痛風傷風驚風ト云心

醉狂スル人ハ官ニ任セスト也乱心ノ人ヲ禪書ニ風癩漢

ト云又風子ト云イヒ熟シタル上ハ只風ト許シテ心疾ノ有ニ

ナルナリ此ハイツモ心氣ノ錯乱ナリ中風ノ疾タル一身ノ氣

血偏枯軟痰シテサ、ノ症ヲナスニヨリテ中風ト名ル

ナルベシ中國ニ墓地ノ吉凶ヲウラフ法アリ是ヲ風水

ト云又地理ト云風水ト云宋儒之言曰有水以界之

丘風以散之ト省身集要ニ出地中ニ風ノ有ヘキヤウ

ナレ又地中ノ氣ヲ言ノミ仙書ニ地水火風ヲ四大ト云コ

ノ四大假合シテ切体ヲナス四大各其源ニ皈ル寸ハ云

煖気ハ飯火動轉飯風ト云々詳ニ圓覺經ニアラハ
世間ノ風一身ニ在テハ動スル処ナリ此亦気ノハタラキナリ
又犬ノ狂タルヲ風狗ト云々醫書ニ云風犬咬傷ト是ナリ然レ
風狗顛狗ト云々醫書ニ云風犬咬傷ト是ナリ然レ
ハ風ト云字ハタ、気ト意得テヨシ医書ニテハ心気気
血ノ衰皆中ト云ナルベシ仙典ハ梵言ナレ氏翻譯ハミ
十華人當時ノ語ヲ以テ移シタル者ナレバ證據ニトリテ
モ宜シカルベシ東涯先生東燭譚

婦人小便如瀑布通ルハ古血ノ所為也
方鑑貞翁云婦人小便如瀑布者乃尾形貞翁

不渴用桂枝湯然者用桂枝者桂枝湯又藥無二用其

義何也

曰仲景云大陽中風陰弱者汗自出衛實營虛故
發熱汗出又云大陽病發熱汗出者此為營弱衛
強陰虛陽必勝之故皆用桂枝矣汗此調其營
氣則衛氣自和風邪無所容遂從汗解非桂枝
能開腠發汗也汗多用桂枝者以之調和營衛
則邪從汗去而汗自止非桂枝能止汗也昧者不知
其意遇傷寒在汗者亦用桂枝誤之甚矣桂枝
湯之發汗發字當作出字汗自然出非若麻

黄能發腠出其汗也 李士材本草通元内桂条下

俗ニ云フ長血白血ト称スルモノ臍トヒトシキ脊骨ヲ失テ刺シ

又腰眼ヲ刺血ヲ吸ハシムル一曰ヲ經ハ必愈又一方アリ

疑々花葉生麻木葉黒焚各十犀角一 一

右細末服サシム

犀角代用近來紀列ヨリ出ル黄牛ノ生角ト呼者ニ

末トシ用テ犀角ノ知トヒトシキヲ覺フ

膈噎ノ如モ脊骨七九ノ椎骨ニ近キ所ヲ刺血ヲ取ベシ其

トルヤ脊骨ヒソキ平尤者ハ左右刺シテ瓢一箇ニテトリ

筆記セリ

刺絡術上部顛顛中部尺澤下部委中右刺絡血量壯

人自二十支至五十支弱人自十支至三十支宜多血粘

液卒倒急迫諸症

發泡術 芫青末和精醋如泥以敷痛処驚風則

点頰理肺病則点背其他凝固腫痛

二慰蒸法 以粗内袋漬塩湯蒸痛処若會急則熬

塩亦可宜腹中急痛腰脚疼痛

測胞子カテヒル 會急缺其具則以臘染紙熬入尿道

細葱亦可宜小便澀溜膀胱不通

同缺其具拔煙管之頭而挿管嘴於肛門允入四寸許從其管口吹入温湯

或摺胡麻於留盆盛布帛漬鹽湯漉之吹入之亦大便秘閉嫌忌大黃劑或難投下劑者

芥子泥和燒酎如泥敷痛處烏頭末亦可宜腫痛項背強痛手足拘急灸表內陷諸患

脚湯法礬石湯能浸自脚及膝可宜諸衝心逆上目痛耳鳴旧年頭痛 備急要術一名小金匱一枚摺ニ見エリ

五毒 五藥之有毒者石膽一丹砂二雄黃三礬石四磁石

五毒補遺之注瀆惡中破散其同土者以維

魚氏筆乘引宋朝類苑

善光寺如來繪詞傳云疱瘡、灸子灸友の時、ありて

畏多くと、敏達天皇忽玉体、あやしく瘡を灸

て、悩の守屋大連、同く瘡を患ひ、若きけふ

其後追々この瘡國中、あやしく死者數をまつ

ど、其病人云、若くは焼く如く、研らふ如く、

泣叫てぞ死し、きりけふ老をふも、若きと皆を

ふりけふ、是は仙像を焼く罪、形人と悲れ

日本紀子見へ、きり傳へ云、此瘡、日本疱瘡の始也と

水鏡云く守屋自寺へ行向ひ堂なきにたぶらば

像を破りて火を注ぎて焼尼の着物を奪ひ

志もとを以て打ちて命を失ふ物敷きつる其瘡を

好し風吹所行し守屋を怨り瘡をうつて天下

あやむらうて命を失ふ物敷きつる其瘡を

人身を焼きやうやう如き覺へるに像を焼く罪

よりこの病おこれ也扶桑略記帝王編年記

著書云く此時の瘡を日本疱瘡の初と云く古書

に見へるものと云今按ふに医療本紀等按へ

述べて是瘡瘡の流行也瘡の世の公認瘡瘡の

名をきつる故に驚く異と云と云へる亀山戾史

徴す是を引くまう云へる又尾陽河村の書記集

解す是時の瘡を日本疱瘡の始と註せりま

と谷川某ハ元来仏法を排斥の人形故に之を

中々日本紀の文をむきく已に臆説を加へたる

と有り其言を云く唐士に仏法の渡りてを瘡瘡の

始と時を同くす我日本に仏像の來りし

この瘡始は是仏を祭るの殃として佛を瘡の罪

何と書きし然共仏法を記すゆへに聖徳太

子と蘇我のる子ハ何の夏と歎く寺を焼く敏達
天皇と守屋と云この瘡有ハ正しく日本紀云ハ如
佛を焼の罪ハ非也加旃唐土疱瘡の始ハ東晋の
元帝建武元年ハ南陽の虜を攻時この瘡を傳
染ハ夏肘後方と云医書ハ見キルハ仙法の唐土ハ
渡リシハ二百五十三年の後也世ハ後漢光武帝建武
元年ハ疱瘡始と覺ヘキ人多ク有ハ同一年号成友ハ
誤キ也曾テ書物ハ不見夏服共ハ也光武帝の建
武元年也と云くハ仙法の唐土ハ渡リシハ四十二年以
漸の瘡也是又同ハ代ハ云ハ非夫史の

詔相違ハ作リ夏の常也と云ハ應知
又和夏始ハ日本疱瘡の始と云ハ聖武天皇仙法ハ
皈依志多キ故異國より疱瘡渡ルと云ハ予續
日本紀を檢見ハ天平七年の既豆瘡同年の疫瘡
を載ラセキ共是ハ流行の甚キを云ハハ
を始と云ハ非也其書例廃帝の天平宝字七年
桓武天皇の延暦九年ハ見キル上古の疱瘡ハ今
六人の麻疹の如凡三十年許ハ一度流行ハ友史傳キ
載ラセキ也貝原谷川の友先生是を不知ハ非也

世ニ勞瘵ヲ治スト云者アリ勞瘵ハ治スヘカラス皆似テ非ナル
者ナリ世医ノ勞瘵ト呼モノハ多ク外邪ノ熱ガ久シク解セズ
シテ持分ノ積氣ニカラミ日敷ラ経テ次第ニ羸瘦シテ
咳嗽吐痰往來寒熱盜汗等ノ症ヲ見ハシ勞瘵ニ
紛レルモノ也不吟味ノ医者ハ勞瘵ナリト早合點シテ滋
陰降火湯ナドヲ投ジテ却ツテ大病ニ仕立ツル者ナリ病
家ハ医ノ言ヲ信シテ其取扱ヒニスル故ニ病人モ自ラ起
ツテ能ハスト覺悟シテ元氣モ日々ニ衰へ終ニ救スベカチ
ルニ至ル者多歎スヘキニ非スヤ中略予カ家ニ勞瘵瘵

板ノ新方ノ密録ニ息先ノ名物

阿魏雷丸檳榔子安息香各等分右七味知末ト

ナシ天徳日ノ平旦ニ東方ニ向ヒ修合シテ糊ニテ赤小

豆ノ大サニ丸シ月ノ初旬ニ桃柳梅杏石榴ノ五木東引

ノ細枝各七茎長サ三寸宛藍葉七枚葱白根共ニ

三茎青蒿若棟根皮甘草各三錢ヲ細アニ剉シ

病ノ童便四合ヲ以テ男患ハ廿煎シ女患ハ男煎シテ

ニ合ヲ取ニ服ニ分チ先ツ合ヲ用ヒテ五更ニ三五十九

ヲ送下ハ服後ニ若シ吐セント欲セバ白梅ヲ含ムベシ天明

ニ至リ黄黑水ヲ下シテ其中ニ必ス勞瘵アリノ子細ニ吟

味スベシ若シ未下ラスニハ早朝空心ニ再下スベシ若シ浮
下シテ止マズニハ龍骨黃連ニ味ノ末各一錢半ヲ白
水ニ調服シテ白粥ニテ補フベシ予僅カ二人ヲ試ミシニ
一人ハ促織ノ如キ虫ニ箇ヲ下シ一人ハ乱髮ノ如キ虫數
十條ヲ下セリ下略南越條島宗如著医聖堂雜詔

寸白虫モ亦九虫ノ一ナリ脉見宗英ハ圍ニ登ル毎寸白虫ヲ下ス
夏三四年許太甚シキ寸ハ心腹刺痛シテ四肢厥逆ニ面唇
色ヲ失シ脉沉細ニシテ將ニ絶セトスル状ノ如キ一多シ常ニ
衛生宝鑑ニ出ツル當飯四逆湯ニ吳茱萸ヲ加ヘテ服用

之間ニ自カラ諸書ノ寸白虫ヲ治スル奇方ヲ撰ニテ屢試
シ間ニ自カラ諸書ノ寸白虫ヲ治スル奇方ヲ撰ニテ屢試

ニ寸白虫ノ變シテ人ニ化シクルニ胡桃肉ヲ出シテ勸メケバ衣
冠ノミ残りテ全身ノ消失セシ一ヲ書タル草雙紙ヲ見タ
リト詔ル聞テ即試ミニ五六枚ヲ食ヒシニ妙ナル哉翼六朝
ニ至リテ圍ニ登ルニ寸白虫ハ下ラズシテ大便ハ平ヨリモ軟カニ
刺痛モ大半ヲ減ス初テ知ル胡桃肉ノ寸白虫ヲ化シテ水
トナスヲ今ニ至ルマテ時々食フニ絶テ寸白虫ノ下ル一無ク
刺痛モ止ミ又由テ思フニ兒サノ慰ミニ書ケル草雙紙ノ中
ニスラ斯如キノ奇方アリ今日雜書ト雖凡亦等閑ニ看
過スベカラヌ下畧同上

或老人の語ニ病人ノ名状シ難キ疾ノ在苒トシテ瘡ハナルニ他
 人ノ怨念有リテ附著シ惱マス一モ間有ルモ也意ヲ付
 テ見ルベシ其候ハ手指ノ爪甲ニアリ爪先ヲ押見ルニ甲根
 半分ハ血聚リテ赤ク先半分ハ血色ナク白ク成ルハ常也
 然ルニ先根共ニ様ノ血色ヲ成シテ全甲ノ赤キハ生靈
 ナリ亦全甲ノ白キハ死靈ナリト云ヘリ千金方ニモ生人瘡
 死人瘡ノ病名アリ凡予未其症ニ遇ハス太甚信シカク
 シト雖凡姑ク記シテ後考ニ備フ 同上
 藿按ルニ生靈死靈ト称セシ者ヲ診セシ折爪甲ヲ見シニ

前代ノ如キ也亦附合猶可試

成るるく成法へ了水とむむ酒と由アるるを雅忠い
 こ若くうりく見奉るこ此御瘡水とむむ酒と

見え重とるり
昔人腫物の治法ハ水をそくきかくるる其
 法奪取の書ニ詳あり後然る子癰疽を

やし者水ヲ洗テ藥とせんよりやまきんはまきん
 かのゆりゆと療法ハかまきん見る色ハ榮花物語此
 時の事ヲ載くといふもむりうおかめ市居まのゆり
 さまかと因りる也日頃のまきんは水おといさせ

其後嵯峨龍殿の重源をめて
 見せ給ひぬれを雅忠うやまやして在おとと故資仲五
 位藏人ありま逢て此御瘡ハいつい之治るなりと云

事之を明日御胸ヲみ給り大事成座とる

誠は胸やみ失治ひくうわさかむ人の胸やむハ終のう
とふ人重源ハ重秀の孫ありとみゆ前段水つけ
の事なすくろ重秀ちるべ胸痛の夏を察しやむ
これハ重源と尋常の医にやむと云

前大平記典葉頭重雅源頼光の脈を診して云夏暑
は傷らして秋必瘧を發せらる理の常也諸瘧皆
風より生ぜ其病因は就く風湿を驅ふと云瘧
病ハ湿を驅ふと云及治療の上まて心得(き)
事也又枕州依豊前と云いぬハ云々云々

大平記典葉頭重雅源頼光の脈を診して云夏暑は傷らして秋必瘧を發せらる理の常也諸瘧皆風より生ぜ其病因は就く風湿を驅ふと云瘧病ハ湿を驅ふと云及治療の上まて心得事也又枕州依豊前と云いぬハ云々云々

水を沸かしていせ給ふ瘧を治るにけり水
を多くいせ給ひて脚色とさひおそくやうり
いとゆめさうかしく人にも見さぬと云々

恒徳將ぶり可水證ハ脉經玉函經等より出て平相國
の水の砂を入らざる項よりハ斯邦の医此療法を
行ひし也後世其傳を失くさる人あり只卒倒する
人の面は水をそそぐ事民間に存せり是亦可水の
法あると云法華經より出きて復形れハ元來枕州の
法もや何ぞん 本朝医談

小右記治安三年九月八日己巳面疵者以菘蓮葉等三種湯
洗且著地菘今日以柳湯洗疵二十餘今日見七分許愈欵
十日壬申忠明宿衾來問頰疵申云只以柳葉蓮葉湯等
可洗十四日乙亥頰腫惡血之所致歟相成朝臣用蓮葉湯
療治又依夢想傳支子汁以桓盛令古勅申云在崇無氣
相剋所致欵日者蓮葉湯等頗温以彼等洗頰熱氣發
申有夢想仍傳支子亦以蓮葉汁洗面尤有驗十八日己
卯以蜜和舊矢胡粉等傳面昔辛巳以蓮葉湯冷每日
兩度洗傳蜜和舊矢侍臣相成朝臣丁寧療治廿二日
癸未給相成朝臣馬依療治前驗因朝臣明生復夢見
寐告三種藥事云傳桃核汁極優石榴皮未知必可忠
明勸云桃核皮肉鉄白能舂令泥傳三日甲午傳桃核汁
有驗四日乙未面疵漸減桃核療治逐日得驗五体身
令集藥
物本文と同

我國療病の方大已貴少及名二神初ら幸舊多記古
事記日本紀等に見えく其方上古よりまひのきぬを
ハ見つゆき事有り一医の字讀てスシと云ハ奇也其
術の奇効有るを云也藥石をスリと云亦奇
の義也と東雅に見り二神常陸國跡を以給ひ

事文德実録子見り鹿嶋大洗磯前明神の社延
喜式子見り古醫師の制度傳をうけて手入
くふ書籍を試て後補せらる也朝野群載 大政
官存 式部省 瘵補醫得業生事 醫生正六位行
甲朝臣文位左京人得業生大中臣致忠奉試及第徒
五位下權醫博士兼丹波介清原真人為時弟子

讀書 新修本草經一部 黃帝明堂經一部 小
品方一部 右得宮内省本年月日解任之者某宜依

請者宜承知依宣行之存到奉行原文軍謀布しよ
みよし其大意直に

其類の並み皆の續書にれ各其人の好し其類

其說今證類の中子散見又本書ハにらひて明堂
小品亦らうく續記天平寶字元年の敕子より玉冰

編次せよ已前の素問も昔斯の邦子より是亦
傳らる及律云允造御膳誤犯食禁者典膳

徒三年註云造御膳皆依食經若乾脯不得入
大膳黍米中莧菜不得和麩肉之類むの膳部ハ

供御の品々皆食經子見合たり事知る也其食
經と今ハ傳はらる世次第子降らむ古の書籍ハ

大抵ありふ也噫 本朝医談初篇

祖苑聯芳集谷源文ノ詩

野外收歸帶晚烟 根塵脫盡白如綿

命門一灼死中活 太却從前萬病緣

大村福吉ノ私ノ字ヲ作リシヨリ江訖其見ヨ此ノ人治瘡記

ト云書ヲ作リ夏續後記ヲ見ヨ是ヲ斯邦外科

書ノ始アリヘキ

足利直義惡瘡ヲ患一時乘舟一列法印廿五味藥ヲ用

ひて愈由後其方三好松永ノ家ニ傳リ藥味ヲ減

して三五味と稱し打撲金瘡ノ藥ト云後一復

目ヲ歸人産前産後ノ藥ト云藤王且勿安其湯ノ

を入り多味ノ藥ト亦廿五味藥ノ加減也此二方今世

醫用甚とも立方ノ人ニ至てハ知多ク人少ク又瘡毒

用ふ三喜慈悲藥ト云有西忌記遊擊手散萬外集要

茯苓湯瘡治本談百中飲名ハ此共大同小異

一ノ亦一列ヲ出多ク本朝医談ニ編

一人ノ律師ありて渡唐一舟漢ノ術ヲ傳へて飯ヲ足利

ノ三歸其流々けて關東子ヲツラむるも一ノ上有人

きを古道三溪と云一人漢東へ入りて此流ヲ傳へて

上洛しけり其筋ハ三飯ヲ受聞リ此共物ヲ唐ニ

知_らず_るふ_く都_をし_てあ_らむ_の醫_書を_はら_る日_に決_議
講_終り_て医_道始_るく_るさ_らに_はら_るや_るあ_らる_是る_當流_也
風_の表_{より}裏_{より}入_也志_つる_人の_膚は_こま_やあ_らる_垣を_と
の_止す_間あ_らる_吹入_様は_不覺_風中_{より}風_を傷_まか_す
と_医書_に有_故に_工夫_のあ_らる_流て_医者_の心_を風_に
垣_壁より_吹入_やる_思へ_さま_かの_物を_有へ_る但_し一_の
氣_の所_為也_膚を_風に_吹ま_して_いひ_けま_る膚_に有_る
あ_らる_あら_るあ_らる_内に_入つ_て熱_あら_る也_内に_熱あ_らる_外に_之寒_あら_るて_鼻つ_まり_咽を_反と_る也_然る_も藥_を
性_の藥_はあ_らる_風を_引き_掃き_外へ_追出_する_也
日_よの_表より_内の_熱氣_外へ_浮あ_らる_て膚_の
を_寒あ_らる_も明_く病_をあ_らる_也然_る風_を引_き掃_き
之_風を_内へ_入ら_る表_を冷_て氣_を内_へ引_入ら_る也
其_氣を_追返_て藥_を發_散劑_とも_也故_に發_散の_藥
ハ_皆氣_を下_し氣_を拂_ふ藥_也又_風藥_とも_有
是_ハ風_を去_らと_心を_なす_藥の_性風_の如_く筋_骨
の_皮より_迄吹_入て_氣を_扇き_出す_藥性_也右_の
氣_を下_す藥_ハ風_藥を_手傳_へて_氣の_内に_入ら_る
き_らる_外へ_追出_す也_風を_依り_て起_りあ_らる_て

性_の藥_はあ_らる_風を_引き_掃き_外へ_追出_する_也

日_よの_表より_内の_熱氣_外へ_浮あ_らる_て膚_の
を_寒あ_らる_も明_く病_をあ_らる_也然_る風_を引_き掃_き
之_風を_内へ_入ら_る表_を冷_て氣_を内_へ引_入ら_る也
其_氣を_追返_て藥_を發_散劑_とも_也故_に發_散の_藥
ハ_皆氣_を下_し氣_を拂_ふ藥_也又_風藥_とも_有
是_ハ風_を去_らと_心を_なす_藥の_性風_の如_く筋_骨
の_皮より_迄吹_入て_氣を_扇き_出す_藥性_也右_の
氣_を下_す藥_ハ風_藥を_手傳_へて_氣の_内に_入ら_る
き_らる_外へ_追出_す也_風を_依り_て起_りあ_らる_て

風を引くつと思ふ風ハ内ハ入内ハ入也冬の日

也風子吹きて道を行き咳気せり也和極集感冒ト咳気

也気内より張切く道を行故也風吹也座敷子

居く只の洞子咳気也是ハ氣ウウつりと成た内

戸の古き間より出やくと風ウあたると気ウまると内へ

引入と其キク水と垂と出ると出る也風ウ

内へ入るなり風子行り身子行り其る気ウ

内へ入内也医者大いの人ハかやりの工夫也ケ存

の公持を合点せぬハ素人とも身の為子も也

夫以陽入陰申動胃纏縁申経維絡別下三焦膀胱是以陽気下

下本文子より初く明白なり仲景の書子と邪子押ひきたる気

の経絡子纏縁を治法 初風子あくと思ふ時蜜柑

の皮一ツ焼て生姜おと咬そへて湯一杯酒少飲て風

何よりたる時の気を外へ追返せハ咳気子あくと也かや

のるを醫道とや也方を以て薬合せらるハ誰とせふ

方ハ醫道得るはもの手本にして置る物也醫道

と得きハ方ハ病子より何れと胸より取出る方とせて

以方ハせぬとぬを好と人千金方治病三年乃知天下無

虚著方劑無益といへる古人の成方を今人の病人引當ふを

丹溪ハ局方学とせり今世古人の成方を慶せらるを専

とせらる故子古の本草学わろひつり西忌流覚書云西忌入

藥取しうらま木立の有けり中ま入て木の枝一握切く
三四本きささく大中小組合て煎く用たり入道のすさう
き五味さへ覚へてあまの成るきる也苦を以て脾胃を厚
く甘を以て胃を補ひ酸を以て肝を厚ある理まおい
る至極又云気ハ形あき物せぬハ病へき様か一気滯
せり

まハ其滯たる處の肉血藏存やむ也抑生の丘法は病
と云夏有る人の身の病と同一夏也気ハ惣身へのひて

滯あまぬハ病ハあはれ也授蒙聖功方 又気ハちりてとくか
氣門可並考

くぢれハ病あま是ハ気ハとくぢくぢくぢハカたうく免了
得せしう所とくまうて病なあはれ也風ハ身の内ま入

らぬも寒風ハ気ハ追入まて内ハ集り外へむハ
射内血とち塞りし内外ハ思ハ又射ハ物ハ思ハ

つまら所から病出はれ也氣滯あまぬハ一切病あま也七情の

病皆氣の滯也七情の内喜と怒と驚との三ハ気ハちり

てとくふくあま集り鬱あまらるハ有まきまぬと氣

ハ通れハ氣のカハとく成りぬ得てとくあほる也

憂と思と悲と恐と此四ハ皆氣集りなむハ七情の

滯の病なやむ也然ハ七情共ハ皆とくこわら也外より犯

を六ハ風寒暑湿燥熱皆天地の気ハ人の身ハあま

てやむ也人の身ハ小まてとく天地の気ハ大まてはれ

天地の気ハ押しとまきけて煩也東垣升陽を以て名つら
方多し蓋胃の陽氣を

の病因むく、同門の人各いひ傳えてあそあつたの
近世師承の学お移ひて其旨地はおちんとは澤庵の
速に頼て予輩傲言を屏く夏を得きり推し廣
めて是を論せし山豈唯病因のいふ人もや物として貫
通せざる事なかるべし

澤庵和尚仮名書五藏の次第と云書

醫者意也ト確言萬事ニ通ズ医者衣也衣服ヲ美ニス医

者夷也動モスレバ人ヲ夷フ医者稻荷也尾ヲ不出シテ人

ヲ誑ス人心觀機漸又有り候京師奥道逸先生云医者居

也父祖ノ餘蔭ニテ居ナカテ大医トナル医者節也アメラ子

ブラスヲ術トス医者唯也何復モハヒビニ云テ承諾ス医者

フル務トス又曰ク医者位也位階ニ上ル程藥代厚シ医

者以也以辯誑入以一倍九医者痔也腰ヌケサルニ駕ニ

ル一医者葦也立ビル程易折医者違也言行相違ス

ルナリ下略杏林内者録市医之部

奇魂ニ瀧清曰醫者字後天及役酒工即連也矢猶鐵及

言畜矢及酒於之備救急也猶匠之從之從之乃知医者

俱在ニ于術也

又一説ニ醫字ヲ解ノ藥一服ヲ矢矢ノ如ク効アリ礼ヲモロフ礼ノ

上ニ置ク又モロフト酒ニスルト云

八條殿脉絶鼻気冷予曰四逆湯可用諸医可然と
申之藥箱を携へ竹田野菴祐乘上池を見せ民
部御法印御檢使にて調合と民部法印自煎
て與之一服脉微頭二服脉全調四肢温翌日平安
十餘日して本腹を秀吉公御感の餘御馬を下さ
ふと 天正記

宇治川の戦已に敗せし筒井淨妙ハ平等院に入て手負
處に灸治して歸りて 平家物語

京北鞍馬山の麓農家子小兒の堂に黒藥を塗りて爪
際より糸の如き物を出し是を疳の虫を取と

皆をら言也此ハ咒法にて尋常の墨土にて白き
よのひのつらふ出る一奇と云べし 唐の書にハ見當
らば 本朝医談二編

交構訖交構ハ生々ノ資始人倫ノ根元懐ニズハ有ヘカラ
ス然ルニ任世ノ輩歳レニ頼鳳倒鸞欲情ヲ逞フ
スルノ具トス衰ムベキナ嘗テ聞ク彫匠刻意ノ木
龍ヲ彫ス経年終カニ成ル其妻孕メルアリ彌月達生
ノ兒惟三指アルノミ宛モ龍ノ指ノ如シ其兒長スルニ及ニ
テ彫刻出藍ノ譽アリト此ヲ以テ觀之男女交構ノ

際意識ノ注スル所必ス其感應アリ生児ノ賢不肖モ亦
 之ニ由ル淫慾ヲ以テセバ其子必淫蕩ナラザレトヲ得
 ズ偷盗ノ情ヲ欠ムキハ恐クハ盗ヲラニ若シ誠意正心
 ナルキハ其子ノ高潔期ノ俟ツ可シ古人胎教アリ然レ
 凡交媾ニ説及セス或人云ク譬叟ハ頑ニシテ大舜ヲ生レ叔
 梁紂ハ野合ノ仲尼ヲ生ム子ガ説良ルニ似タリ予曰ク靈
 泉無源芝草無根聖人ハ千歳ノ一人ナリ山豈常套ヲ
 以テ説ソクヲ得ニヤ
平安船曳修徳婦人病論前編卷二
 普稜吉所著西洋書譯セシモノナリ

江村專齋永祿中ニ生キ匡ヲ以テ業トシ以寛文ノ初子
齡ニ及バ百歳後水尾上皇養生ノ法ヲ勅問有

話と名ク其中ニ云ク如女あり時延壽院玄朔ハ既ニ
 壯年ニテ故道ニの嗣トシ浴中匡師の上首也人々敬
 慕シ故道ニハ其時耳遠ク隱居セバ故玄朔盛ニ
 療治トヤトシ方々招待セシ其時ハ乘物ト云ハ彫ク大
 おふ朱傘ヲさしわけらせ木屐ニ杖をつき何方
 と歩行セ人々ややし復まて有りト其頃ノ匡師
 ノ形容思見見るべし本朝匡談

神鳴ト云狂言ニくまると持とぬゑせとまゝさはたや頼
 みありとんト云

中古黄蘗の行をん、夏知はへ、
神鳴狂言ハ録事法
眼の瘡治を何義去

て作り也。蘭室秘藏治口舌方黄蘗真者とあるを見
北ハ唐山ヨハ偽物有と見え、其選此邦諸列多有之

華人購求而載帰則華中此物不多。本朝迄誤
而其所重可知

公羽草三卷云大文字屋彦右衛門越後屋八郎右衛門カ傳ノ

評ニ曰治世ノ暖簾ハ簾ナリ、群寄ル人ハ敵ナリ其萬人

ヲ靡ケテ降ス処策ナリ其謀ニ奇正偽ノ三ツ有テ毀誉

様々ナルナリ畢竟其ノハ賤シクシテ其成ヌ所ハ兵道ニ

異ナラス仍テ爰ニ揚ルナリ予考ルニ今日流行医ノ構ヘモ亦

然リ粟ノ木ノ駒寄ハ逆木ヲ學ヒ賤ニ壁ニ換テ出格子ヲ

附ケ高石垣ヲ擬テ八枚ノ腰板ヲ辨次ニ鉄鉋兒ニ准

ヲ設ケ火矢布ギノ水溜ヲ内庭ニ置テ時計ノ魯ハ相圖

ノ鐘ノ如ク堂号ノ額ヲ懸スルハ簾指上ルニ彷彿タリ大

門玄淵ハ文字ニ開タルハ孔明ガ籠タル街亭ノ城ノ如シ

篝火ニ換ル鳥薪ヲ大火鉢ニ燃シ奥ノ洞ノ金ノ音ハ

琴ノ音カト聞迷フ故病魔疾敵引卒シテ寄來ル数

多ノ敵勢モ聞シニ増ル構アト心中感セヌ者ミナシ先陣

ニ陳ト責上リ待間無程出來ル大先生ノ調台ハ宰我子責

ニ非レハ蘇秦張儀ノ如クニテ如何ナル庶敵病人モ此医師

ナラテ今世ニ我カ一命ヲ託スルナシ假令盛殺サレタリトモ何

ゾ恨_レ不_レ厭_ト思_ヒ附_カヌル奸謀ハ実ニ正啓大文字

及所_ナレ凡其家ニ代_ト不保_シテ子孫ノ行衛モ不知_ハ名

護屋和田氏ヲ初_トノ天保ノ今日ニハ典藥寮ニ御醫師

ノ名前八十人餘モ存_シテ其家連綿タルハ三十軒ニハ不

足_トカ_レ此場所ニ至_テハ如何_ナレ古今ノ名医_テモ正啓ニ

不及_トナレバ流行医ハ全盛ノ時宜_内省 杏林内省錄

藿按ニ文化以_テ来典藥医_師ノ絶_ルハ名護屋玄以和田

泰純ヲ始御菌生駒上田奥道逸_連藤中村原田等

更跡_カクナ_レ

村上等詮ハ三条油小路ニ住_ノ數世医ヲ業トス十六歳ヨリ

シ俄ニ法眼ヲ賜_ヒ後法印ニ叙_セ之_レ春臺院ノ震翰

ヲ賜_ヒク_リ翁州

幕府ノ臣山中源右衛門為人任依ニメ名鳴_于海内以_テ大命

ト稱_ス或時有病医ヲ招_カル医病床へ到_見レバ頭痛スルト

思_ハレ太キ繩ヲ用_テ頭ヲ縛_リ作_リ髻ノ大ノ男紺ノ袴ノ

膝頭許ナルヲ着_シ右ノ繩ノ先ヲ扣_ヘ居_ル病人大音ニテ

充_ツ驢_ニ此へ来_テ脈ヲカツツカニテ見_ヨト叫_フ医其勢_ハヒノ

ハケ_シキニ惶_レテ恐_ク遠_ク寄_リ診察_シ藥ヲ與_ヘ早々_逃

歸_リテ人ニ語_テ吾年来_テ業トス_レ凡如此_ニ危_キヲ

ニ出逢タル夏ナシ自然病症ノ言様病人ノ心ニ不合時
ハ打擲セラレム夏無疑ト云ヘリ 武備目録

又一依士飲博伎娼ニ耽リ金錢盡タレド人貸ヲ不許因テ女
計ヲエミ出シ當時行ハル医ノ財ヲ積シ者ヲ急病ト詐
テ招キ強テ百金ヲ借ニテ乞フ若シ不諾夏不測ニ出ニ
勢ニテ坐ノ左右ニ鬼ノ如キ惡漢トモ眼ヲ張リ居ル医無是
非百金ヲ取寄セ借ケルハ厚ク謝シテ放テ歸セリ此士後ニ
身行ヲ改テ後ニ官寵ヲ得テ借賤モ償ワレシトヤ又先年
貧窮ナル官家ノ公子驚風ニシ或大医ヲ招カル診視
ノ藥ヲ調進レ必可癒クヲ告テ飯シ後次第ニ病重ク
前医ハ不知翌日參視スレハ其家ニ入テニ病

牀ニ通サル医最早死後間アル容子ヲ驚キ病室ヲ出シ藥
籠ヲサレツケ調藥セヨト有ケルハ医不堪慙愧謹テ逝去
ヲ告ゲ且診察ノ拙キヲ陳謝スレ共不許益詰ツテ曰凡
大医ノ藥ニテ可死義ナレ是非調藥スベシト云ハ医大ニ
窘迫シ門外へ出奴僕ニ命メ藥籠ヲ使請凡不渡故
後日人ヲ頼テ家士追色々罪ヲ謝シ黄金数斤出メ藥
籠ヲ請戻セシト也如此病家モ希ニ有レハ頓テ大
言ハ不可吐ナリ

那波魯堂云經史百家ノ書ヲ讀ニ是ハ無用ノ処也ト
見残ス古又アリ辟言ハ尚書ノ禹貢史漢ノ天官律曆
杯ノ処ニ到テハ意ヲ止メテ讀ナル人多シ後ニ悔ル又アリ
人ノ見落シタル所ヲ拾ヒ求メテ可讀 四方ノ視

按ルニ此實論ナリ醫書ヲ讀者此心得緊要也先一番ニ
内經難經甲乙經ハ後人ノ偽書ト稱シ不讀古方者流
ハ後世ノ書ヲ讀又女ク後世者流ハ石匠藉ヲ見ル
女レ内科ハ大部ノ書モ全部熟讀スヘキニ多クハ平生手

ガケル処ノ病症ノ部許ヲ閱シ喉科ハ婦人ノ部ヲ不讀婦
人科ハ眼疾ノ部ヲ不讀眼科ハ金匱ノ部ヲ不讀シテ完部
計ハ眼疾ノ部ヲ不讀眼科ハ金匱ノ部ヲ不讀シテ完部

徒ニ虛名ヲ釣シ為ナリ誠ニ那波氏ノ論ノ如ク人ノ不讀ト
コロモ廣ク熟讀メ見ヨ世匠ノ家方家説ト稱メ秘傳
スル者多クハ古匠籍ニ見タリ必シモ名家ニ非常ノ方術
アリト不可思ナリ近來又別ニ蘭科用ケテ其門遊フ輩

ハ翻譯ノ書許讀テ漢土ノ匠籍ヲ讀ル女ニテ已カ所
學ハ從來絶テ無キトニテ新奇巧妙ナル様ニ思ヘ凡既ニ
獨嘯菴漫遊雜記云和蘭之匠善汗吐下實曆全
午春余西游到長崎就譯師吉雄氏得聞彼匠法
其治術峻劇纖巧難遠用於邦人然而至汗吐下

ふと載く菌毒子糞汁と云く共唐土よりの療法
して斯國の人ハグふ穢物ハ用ふ多也雜誌云此時
日本僧定心寧死不汚至膚理析裂而死其糞カチ
免さるハ是邦人の天性也 本朝医談

神代子うさきとわにと争ひ 夏是医藥のたき
也うさきとわにと人の名と我くのくハ何も
不な 日上

痘瘡子あけの色なき式あり應るいさかかめと唐錦

子いへり又酒湯か多ふ夏冠婚子亞式とあり

おろいつの頃とあふを志ぶ及ば櫻陰有談子公全
心鑑を引くと唐土より痘見心酒湯子浴さる

共之人は盖酒湯ハ瘡痕を愈を為す浴さる

上代より云傳へらるあるんとあとのきえ

ぬ酒子て洗へハ愈ふし 今昔物語

翻譯名義集頰部曇曼過蒲曇頓浮陀此云疱狀

如疱瘡爰子瘡痕をあらふと云梵語ハあらぬ

本朝医談

痘子神有し云隨園詩話ハ出ると云痘神之説注

傳子不見

新編本草

蘇子麻子... 蘇子麻子... 蘇子麻子...

蘇子麻子... 蘇子麻子...

蘇子麻子... 蘇子麻子... 蘇子麻子...

蘇子麻子... 蘇子麻子... 蘇子麻子...

蘇子麻子... 蘇子麻子...

蘇子麻子... 蘇子麻子... 蘇子麻子...

蘇子麻子... 蘇子麻子... 蘇子麻子...

